

一、二、三章の内容に関する評価は、すでにそれぞれの章のところで行っているので、最後に、全体を通して内容とは無関係に感じたことを卒直に言っておきたい。著者は難解な表現を避け、論旨をスッキリさせることに最大限の努力を払っている。このことは高く評価したい。しかしそれにもかかわらず、この本の理解は、著者が意図しているほど容易ではない。このことは、内容そのもののむつかしさを別とすれば、おそらく著者の表現技術に関係する。というのは、この本では著者が強調したい点と、その強調点を浮ばりにするための背景とが、同じアクセントで述べられているために、読む側としては、どこに焦点を絞ればよいか、見当をつかかねるからである。表現がもう少し起伏に富んでいると、この本はもっと理解しやすいものになっただろう。

さらにつけ加えれば、これは著者の責任ではなく、出版社の責任であろうが、引用されているドイツ語の分綴法にいくつかミスがあった。ちょっと注意すれば容易に訂正されるミスであるだけに、残念である。

(A5判 二四四頁 一九七六年八月 ミネルヴァ書房 二、八〇〇円)

(京都教育大学教授)

藤岡謙二郎編

『日本歴史地理総説』総論・先原史編、

古代編、中世編

秋山元秀

先日必要があつて人文科学研究所歴史地理研究室というゴム印を注文した。できたものをみるとハンコ屋の方で気をきかせたのか、歴史・地理研究室と中点を入れてある。歴史地理とは何であるかなどと説明する時間も気力もなく、持って帰ってナイフで中点を削り間を詰めて使っている。歴史地理などという言葉は一般にはおそらく耳慣れぬものにちがいない。いま手もとにある小型の国語辞典をいくつかみても「歴史地理(学)」という語を収録するものは無い。もともと歴史地理(学)という語は Historical Geography の訳語として作られたものらしいが、当初から「歴史と地理」の意味に曲解されることが恐れられたようである。「史的地理」なる語を提唱するむきもあった。『歴史地理』一―四、歴史地理なる名称に就て)ちなみに漢語辞書でもこの語をみるのは「Historical Geography、人文地理学之一部門」とする旧『辞海』のみであり、中国歴史地理学の専門誌として有名な『禹貢半月刊』も最初の英訳名は The Evolution of Chinese Geography であつた。The Chinese Historical Geography と変更されたのは第三巻、民国二十四年からのことである。このようにヨーロッパ近代

地理学の東洋での翻訳語としてあらわれ、当初は必づしも熟した語感を持ち得なかったこの語も次第に定着し、今や地理学において確固たる地位を獲得していることは、学会組織や文献目録の目次をみてもよくわかる。しかし、隣接する他の学問分野、さらに一般的知識の中で、歴史地理学という一つの分野が十分理解されているとは思えない。評者自身、地理学とは無縁の人に専攻を説明する時に「中国の歴史地理を勉強しています」といっても、当惑したようなまなざしに出合うことがよくある。それは定数係数線型偏微分方程式とか特殊相対性理論というような語に対して当惑するのは違う。歴史も地理もよく知っている語であるのに、それが二つつながった時、併列関係なのか、一方が他方を形容する関係であるのか、よくわからないという当惑であろう。生物物理とか物理化学という語もこれに似ている。ただいわゆる歴史学の側が、歴史学研究の補助学の一とみなしてやろうという大人然とした態度をとるのに対し（もっとも新『岩波講座日本歴史』別巻2、「日本史研究の方法」に地理学への配慮が欠けていることは編者の反省にもあるように残念なことである）地理学の側ではややヒステリックにみえるほどの離縁状が出されるなど、現今はやりの境界領域の研究とは少し様相が異なるような印象を与える。しかし最近、歴史地理学者と名のる人達のする航空写真や大縮尺の地図を用いた新鮮な方法、それに加えて文献史料も積極的に利用して新しい視角からの解釈に裏づけられた、古代史・中世史の様々な問題に従来の歴史学畑出身の研究者にはなかった視野を広げる試みは歴史学の側からも高く評価されるようになり、地理的事象、地理学的方法への関心も高まっている。例えば、中世村

落の歴史地理学的研究を次々に発表してこられた高重進氏の論文集『古代・中世の耕地と村落』に対して『史学雑誌』（八五一）、『歴史学研究』（一九七六一）はあいついで詳しい書評を載せている。前者では個々の事例に対する批判はあっても全体として好意的な判定が与えられており、後者では基本的問題にいくつかの疑問が寄せられ、全体として厳しい批判が為されているという違いはあっても、高重氏の研究が歴史学者の批評の対象として十分耐え得るものであることでは一致している。また逆に岸俊男氏のように地理学的方法を駆使した都城や古道の研究には地理学者も脱帽しなければならぬだろう。毎年発表される『史学雑誌』『人文地理』誌上の年間展望欄をみればこのような相互交流が徐々に深まりつつあることが明らかである。ある研究を、その筆者の出身学科だけで〇〇学的研究とレッテルを貼ることは、縄張り意識のあらわれにすぎない。

このような気運にあって、これまで研究を蓄積してきた日本の歴史地理学が現時点でその総決算をしようとして提出した資産目録、これからとりあげる『日本歴史地理総説』を評者はそのようなものと考えている。そして今回、この書を地理学の側から書評することを求められたが、この書評を書くには評者自身躊躇する点がいくつかある。まず、全五冊の企画のうち、総論より中世に至る前三冊が発行されただけであり全体として批評するには時期尚早であること。次に、最も重要な点であるが、このように時代的にも地域的にも多方面に互る内容をもつものを、評者の限られた知識で正当に批評することは不可能であること。特に日本歴史地理学の研究成果として第一に挙げるべき条里・都城・村落など

の研究に疎いこと。そして評者自身、中世のところの執筆者の中に名があり、編者からは、全体に亘って援助を受けた一人として名を挙げられていること、などである。最後のことは校正の一端をお手伝いさせてもらった程度で、評者もこの書の成立に責任があるなどというのは痴しい限りであるし、執筆といっても二軍のピンチヒッターのようなものであるから、まあ勘弁してもらえよう。それにしても上記の欠点は覆い難く、その批評もいきおい片寄ったもの、総論的Ⅱ従って非建設的なものになってしまいうだろう。今後、各問題の専門家から個別に詳細な批判の寄せられることを期待しつつ筆をすすめてゆくことにしたい。

この書の内容を逐一紹介してゆくには紙数が足りないので全体の構成を紹介するに止めたい。全部で五冊、第一冊は総論と先史編、原史編を、第二冊は古代編を、第三冊は中世編を収める。第四、五冊は未刊であるが各々近世編、近代編と名づけられる。このように先史(旧石器、縄文時代)、原史(弥生、古墳時代)、古代、中世と時代区分がされ、その内部はいくつかの地域に分けられる。地域区分は時代によって異なる。旧石器時代は区分されずに日本全体、縄文と弥生時代は東日本と西日本の二区分、古墳時代には畿内とその周辺が加わって三区分、古代になると、畿内とその周辺、山陰・山陽・南海・西海道、東国、東北辺境の五区分、中世には、名称が若干変更される他、東国から関東が分離されて六区分が採用されている。そしてさらに各地域は、系統的項目に従って記述されている。それは縄文、弥生時代では、集落、産業、交通・交易の三項目であるのに、古墳時代では政治的領域が追加さ

れ、古代ではさらに詳しく、政治的領域、都市、村落、開発、人口、農牧業、水産、鉱工業、交通と九項目に増え、中世には城館、商業がつけ加えられて十一項目になり、農牧業は農林業に改められる。この系統的項目は原則として一つの時代では、すべての地域で同じである(但し、中世では西国に城館を欠き、関東と奥州では村落を集落とする)。各系統的項目は原則として一人の執筆によるが、数人によるものもある。各々執筆者の名を明記し、執筆の方法、内容は各人の自由に任せられているようである。その分担も古代編では、たとえば政治的領域は服部昌之氏が、農牧業は桑原公徳氏が、鉱工業は足利健亮氏が全国に亘って執筆するというふうな、一主題一人という形に近いものが多いが、中世編になるとそれはかなり崩れてしまう。それはある主題について全国を通観しようとする時には障害になろう。また各項目の長短も一様ではない。たとえば、中世の村落では、畿内とその周辺では二十五頁が当てられているのに対し、奥州では五頁だけ、という具合である。項目相互の重複も多く見られる。農業と開発、あるいは村落とはどうしても同じことがらに触れねばならないだろうし、都市と城館も重なる部分が多くなろう。また人口など資料の限られているものは各地域で同じ記述がくりかえされ、都市の人口は都市の項で述べられたりしているから、全国で一本にまとめた方が能率のかもしれない。

自然的背景に関しては、第一冊に地史と気候史という一章が設けられて特に第四紀に重点を置いた自然史が簡略に解説されているのに加えて、各時代の最初に全国的な概観がなされている。

この書の第一の、そして最大の特色は、日本の全時代（近代までではあるが）、全地域に亘り、系統的な記述を行う、即ち編者のいう時の断面的歴史地誌を作りあげようとしているところにある。即ち、古代の条里や国府、或は中世村落というような個別的事象に対する全体的な業績はこれまでも出されているが、地誌として、それらの個々の事象を総合して地域という枠の中でまとめてゆくことが試みられたことは初めてである。以前に出された『歴史地理講座』日本編や、各種地理学講座の歴史地理の部分の記述は、規模の点ではるかに及ばない。強いて挙げれば吉田東伍『大日本地名辞書』が、辞書形式をとるが全国の歴史地理的事象を全体的にとらえようとした唯一の例といえると思う。海外の例では一九三六に初版のでたH・C・ダービー編 *An Historical Geography of England before 1800* が時代区分は此者に比へて詳細であり、扱う地域はイングランドのみである違いはあるが目的とするところは似ている。このように大規模な構成をもち、三冊で延べ五十四人もの執筆者を擁する本書に先に触れたような多少の重複や齟齬があることはやむを得ないだろう。見解の相異があれば、それはそのまま願われている方がよい。この企画が立てられたのは五年以上前のことで、執筆時期にも新旧があると聞く。このような労多き仕事の実務を担当された、書店も含めて編集関係の方々に、まず敬意を払いたい。

最初に評者はこの書を日本歴史地理学の資産目録のようなものと書いた。つまり、この『総説』には現在の段階で獲得されているものは書きこまれているが、無いものは無い。そういう単純な原則が、全時代、全地域、全主題という網を張ることにより、

実に明瞭に浮きあがっている、と思うのである。さらに詳しく検討すれば、今は不足しているものから増えようとしているもの、今は無くてもこれから入手されようとしているものなどの動向も把み得るはずである。項目によっては歴史学者の成果を十分汲み取っていない部分もある。あるいはそれはできていても地理学の立場からの練り直しができず単に図の附いた社会経済史に止まるものもある。そのような点を指しての玉石混濁だという評語は当を得ている。しかしそのような状態にある現在の研究段階が、それこそ時の断面的如く明らかに、これからの研究者にとっての大きな叩き台が出現したことは、日本歴史地理学史にとって重要な意義をもつ。そしてその中には紙数や時間の関係で十分発展させられないまま書き下された、新鮮なアイデアの萌芽も多く内包されているにちがいない（実際、この書の出版より早く、同じ執筆者によって個別論文の形で、この書の内容を越える成果が発表されている例もいくつかある）。いわばこの書の個々の項目に書かれたことを早く時代遅れなものにすることがこれからの任務であるといえよう。

地理学の側から、という言葉は私は何度か使ってしまった。歴史地理学は地理学の一分野である、ということとは『総説』の編者も述べているところであり、——それ故に私が書評を書くはめになったのだが——、それならば次に『総説』で地理学がどのように実現されているかについて述べなければならぬ。

文献史料や人物を扱うのが歴史学で、遺跡や遺物は考古学、地図や地形が地理学などという学問分類は、研究方法（より正確に

は技術、または学生の訓練過程」としては意味があつても、科学体系としては将来全く意味を持たなくなるであらう。たとえば古代都城とか中世の交通路といった具体的な事象の実証を前に、可能な限りの資料を集め、有効な技法を用いることは当然である。

これまで歴史学者は地図を使うことがでてあり、地理学者が文献史料を敬遠していたにすぎない。しかし具体的な実証で得られた個々の成果を彼は時代という概念に、此は地域という概念に収斂させると考えるなら、歴史地理学を単なる境界領域から地理学の中へひき入れることができる。それが編者のいう歴史地誌に他ならない。地誌は単に個々の事象の記述を貼り合せたものでは済まない。文字通り総説が必要なのである。しかしこの『総説』には地誌的総説は無い。互いの系統的項目の関連、区分された地域相互の關係、或は最初に区分された地域は、本来にその時代の地域区分として有効なのか、という検証、古代、中世を通じて中国地方とか中部地方という単位がどれほどの実態としてのまとまりを持っていたのか、北陸地方、東海地方というような地域単位の方が実質の意味を持っていたのではないか、そのような問題に対する配慮はみられない。せっかくの地域区分が単なる記述を分割する手段に終り、目的に至っていないのではないか。編者の『先史地域の変遷史的研究』ではそのプランが実現されていることを知っているものにとつては不審である。

もう一つの疑問は「時の断面」である。序章「時間と空間」にあるように編者はハットホーンなどを引いて、各々の時の断面において地理学が独立して存在するという。そもそも地理学と歴史学を空間と時間という概念で対立させる（空間＝時間概念は地域

＝時代概念とは全く異なるものだが）ことが誰に始まるかを調べる余裕を今持たないが（おそらくドイツの新カント学派あたりと想像するが）、地理学者ではA・ヘットナーには、あらゆる時代について地理学が成立するという考えがはつきりみられる。しかし一方で、このような「時の断面説」は特に英語圏の専門的歴史地理学研究者からは疑問をもたれ、それを克服する試みがくり返されている（ダービーは先の『イングランド歴史地理』では断面に従って編纂しているが、そのあとで反省し、一九七三年には、新しいものを出した。また第一冊五頁注(8)にあげられている文献は、上記のダーヴィのもの以外、クロスセクション説を批判してできた業績だと思ふ）。時の断面への疑問は、まず断面の時期はどうして決めるのか、歴史学でも文化史的時代区分や、社会経済史的時代区分がある。どれを採用するのか。その根拠は、どのような問題、次に時代設定をしたとして、それではその間の変化はどのようにして視野に入れるのか、変遷ということとは面と面との比較というような静的にとらえられるものだけではなく、時には激しく時には徐々におこっているその過程をとらえる必要がある。都市のプランや地域構造の変化の過程、もっと具体的にいえば古代の律令制下の平安京と中世的な京都のプランとはどこが違い、その変化は何故、どのようにしておこったのか、というすぐれて地理学的な課題はどうしてとらえるのか。という問題がある。

第一の問題についていえば、地理学の立場からの時代区分がもっと試みられるべきだと思う。経済史や文化史と同じく、景観史や地域構造史を創り、それを古代、中世、近世というような枠組みにとどまらず、それ自身の事象の変化に従った時代区分を試み

る。そして、各々の地域に適する時代区分も考えればよい。編者が歴史学の時代区分を「紀元何年といった物理的時間による断面」であるとし、「律令的古代」「封建前期」などの断面を歴史地理学の採用する断面である、というのは暴論であり矛盾している。

第二の問題は、実際の個々の項目の記述では解決されている部分もある。たとえば中世編の畿内とそる周辺の村落や交通の項目では、変化の過程を読みとろうとする執筆者の姿勢がみられる。

これは実際の研究は「時の断面説」の中に収まりきらないことを示している。時の断面毎の地理学などと言いだしたヘットナーにしろ、それを祖述するハッシンガー、ハーツホーンなどの地理学者は、実際に歴史地理学の研究に携ったことのない人達であり地理学の体系化の必要にせまられて無理やり歴史地理学を処理するためにそのような概念を作りだしたものだと思う。歴史地理学者までがそれを祖述することはないのではないか。

以上の問題と先ほどの地誌的総論の欠除を含め、『総説』の弱みは皮肉にも総論の弱みであると思う。もちろん各説の中には自から総論的なものが含まれているので、総論と称する繰り返しや屁理窟の捏回しを避けようという意図があるかもしれないが、それにしては各説の量が少なすぎ、個々の問題にあたって読者は隔靴搔痒の感を免れない。この書が単に便利な体系的事典や文献目録以上のものを目指して企画されたのならもっと総論にページ数が割かれてもよかったのではないか。特に古代、中世では本当の総論が欲しかったという気がする。各々、執筆は編者と谷岡武雄氏という大家であり、以前に自身の著書で述べておられるところであるにせよ、現段階を新しく展望しなおし今後の指針を示して

欲しかった。また古代の総論で現代景観との対比が強調されているのは研究の出発点として、あるいは律令制的発想と現代の類似という点では頷けるが、より近い時代との関係、時代の推移の順序の無視にならないかと危惧する。身近な例では駅家の検証に馬地名を使うにはやはり中間項がいくつか必要ではないか。中世の総論は自然、村落、都市の項目に分けて要領よく問題となる事例を整理しているが、最初のヨーロッパと日本の中世を比較するという雄大な課題に対し、「一口にいつて、農村地域においては開拓の停滞期にあたる点でヨーロッパとは異なり、交通と商業の発達に基づく都市の勃興という点では、いくらかヨーロッパに似ている。」というのはあまりに一口にすぎよう。

以上のような議論は「歴史地理学とは……」などどうでもいいからその具体的な成果を、と考えるむきには（そして大部分の健全な読者はそうだと思うが）はなはだ迷惑至極であったと思う。遙か二千四百年の昔、大洋の西ではヘロドトスは、これは歴史、これは地理などと悩まずにただ語りつづけるだけでよかったし、東では太史公にはじまり長い間、地理的なものは史の中の一部門として疑われることはなかった。歴史地理という妙なことばにひっぱられ書評に名をかりて私は廻り道をしすぎたようである。既に与えられた紙数も尽きようとしている。もっといろいろな面を論評するべきであったと悔まれるが、いづれにしても片手落ちの誹は免れまい。先にも触れたが英国のダーヴィは一九三六年に出した『イングランド歴史地理』の大改訂版 *A New Historical Geography of England* を一九七三年に編んだ。その執筆者はも

ちろん方法論も記述内容も全く面目を新にするものである。また、現在には内容的には既に古いものとされる『大日本地名辞書』には、吉田東伍の強烈な個性に貫かれた、書物としての統一性において決して捨て難いものがある。編者が数十年後の何時の日か、その個性に満ちた『新総説』を創り出されることを願うのは評者だけではないと思う。日頃から編者をはじめ多くの執筆者から親しくの学恩を受けているものの気安さからかえって非礼な言辭をつらねた。お許し願いたい。

(A5版 二二二頁、三一三頁、二八四頁、一九七五年七月、吉川弘文館、二千五百円、三千五百円、三千二百円、第一・二・三冊の順)

(京都大学人文科学研究所助手

)